

## 育児における父親の役割に関する研究Ⅲ — 総括報告 —

総括報告者 川井 尚<sup>1)</sup>  
研究者 川井 尚<sup>1)</sup>, 庄司 順一<sup>1)</sup>, 千賀 悠子<sup>1)</sup>  
堀口 貞夫<sup>1)</sup>, 望月 武子<sup>1)</sup>, 横井 茂夫<sup>2)</sup>, 若麻績佳樹<sup>2)</sup>  
西林 洋平<sup>3)</sup>, 大村 勉<sup>4)</sup>, 大藪 泰<sup>5)</sup>, 恒次 欽也<sup>6)</sup>  
森田 英雄<sup>7)</sup>, 倉繁 隆信<sup>7)</sup>, 浜田 文彦<sup>7)</sup>, 奥原 義保<sup>8)</sup>  
北添 康弘<sup>8)</sup>, 斉藤 晃<sup>9)</sup>, 吉田 弘道<sup>10)</sup>, 井口 由子<sup>10)</sup>  
上別府圭子<sup>10)</sup>, 巷野 悟郎<sup>10)</sup>, 野尻 恵<sup>11)</sup>

要 旨：望ましい育児環境とは、子どもの心身の発達や健康を促進するようはたらく環境であるといえよう。ひと言でいえば発達促進的環境といってもよい。ちなみに、育児とは、子どもの生命を守り、心身の発達を助け、その健康の増進をはかり、そして社会のなかで生活していけるように育てることである。育児には、身体的、心理的そして社会的なレベルでの複雑な働きがあるといつてよい。母親のみで、あるいは母子関係のみでこれだけのことをなし得るとは思われない。一方、現在の家族状況、すなわち、親、きょうだい、近隣の育児サポートの得られない核家族状況、母親就労やそして母親（女性）の広義の社会参加への強い志向を考えると、母親のみが育児を行なうこと、望ましい育児環境を提供することは、難しいといえよう。

現在の家族の置かれているこのような心理社会的状況から、父親も育児においてその役割を果たしていくことが必要不可欠であろう。本研究では3年間にわたり、育児における父親の役割とは何かを基本的なテーマにし検討をかさね、その最終報告として諸研究を総括し、父親を育児支援のひとつの柱として母子保健活動に組み込むため、以下の諸点を提起する。

見出し語：育児と父親、父性行動、父親像、父親行動と母親の育児、心身障害児の父親、入院病児・相談過程における父親の役割

- 
- 1) 日本総合愛育研究所・愛育相談所 2) 都立母子保健院 3) 西林小児科医院  
4) 松山赤十字病院小児科 5) 長野大学 6) 愛知教育大学 7) 高知医科大学小児科  
8) 高知医科大学情報センター 9) 鶴見大学女子短期大学 10) こどもの城小児保健部  
11) 桜ヶ丘記念病院

## 1. 母親の育児の楽しさと父親の役割 (森田班員ら)

- ①育児が楽しいとする母親は、この10年間(1982-1991)で82%から38%に減少している。
- ②母親の持つ楽しさと父親の育児介助時間、介助する事柄とは直接的な関連を持たない。
- ③育児について父親と話し合う頻度が低い母親は、育児を楽しみと思わず、かつ負担も感じている。
- ④母親が幼児期、自分の母親に抱かれたり添い寝の記憶がないとする場合、育児が楽しくなく、負担に感じている。

## 2. 母親の養育態度に及ぼす父親の影響 (大藪班員)

- ①4ヵ月児の養育態度良好な母親は、夫を「養育に協力的」「自分の話をよくきく」「精神的な支え」「家庭生活で重要な決定をする」と評価している。そして自らの性格を「冷静」「辛抱強い」「気楽である」としている。
- ②10ヵ月児の養育態度良好な母親は、夫を「家庭生活で重要な決定をする」「夫の仕事を高く評価する」とし、自分の仕事に対し「社会での仕事より子育ての方が重要」「子育てによって仕事の能力が阻害されない」とみなし、自分の性格を「冷静」「辛抱強い」「気楽である」としている。
- ③4ヵ月と10ヵ月で養育態度良好な母親に共通しているものは、「夫が家庭生活で重要な決定をする」「育てやすい赤ちゃんである」自分の性格が「冷静」「辛抱強い」ことであ

る。

## 3. 父性行動に関する研究—夫立ち合い分娩の効果— (千賀班員ら)

- ①立ち合い群の父親は、子どもとの遊びや世話行動について、非立ち合い群より多い。
- ②立ち合い群の父親は、子どもとの身体的な触れ合いや運動遊びが多い。
- ③立ち合い群の父親の方が、子どもに対し肯定的な感情をより有している。
- ④育児による疲労感はあるが、立ち合い群の父親はそれを子どもに対し否定的な感情として向けることがない。
- ⑤立ち合い群の父親の方が、母親とよくコミュニケーションをもち、親密な関係を有している。

## 4. 子どもに対する父親の意識—SCT・IKSによる分析— (庄司班員ら)

- ①生後9ヵ月から1歳児の父親は、子どもといると、うれしく(30.0%)、心が和み(14.0%)いっしょに遊ぶ(10.5%)等、おおむね肯定的な感情を有している。
- ②具体的な関わりは遊びが多く、遊ぶようになっている(25.0%)、いっしょに遊ぶ(21.5%)、遊ぶと楽しい(13.5%)にみられた。
- ③一方、子どもの泣きに対しては困ったり(9.5%)、妻に任せたり(13.5%)、うるさい(7.5%)、怒る(17.5%)等、耐性が低く、負担に感じている。
- ④妊娠期の父親意識と乳児期のそれとを比較すると、
  - a. 妊娠期から子どもに対して肯定的な感情を

持ち、それが乳児期まで持続している。

b. 妊娠期では観念的であるのに対し、乳児期では現実的で具体性のある父親意識がみられる。

⑤父親は育児においてどうしていいか困り、妻に助けを求めている。

5. 父親の意識に関する基礎的研究—父親像と子ども像との関連性について—(斉藤班員)

①父親のもつ理想的な自己像と類似した役割を果たすよう子どもに期待している。

②理想として父親が持つ自分を中心に置き、他をコントロールしたいという自己意識は、それを充たす理想的な子ども像(子どもは素直であるなど)と関連する。

③現実的な父親像、子ども像になると、しつけに関する領域が中心になっている。これは、子どもの現実的な成長や相互交流の結果、道徳的な価値判断を含むしつけに直面するためと考えられる。このことは父親は子どもの社会化に関与していることを示唆している。

6. 障害児の父親の育児意識—心身状態の評価から—(恒次班員)

①父親の心身状態を規定する要因として、父親が相談できる相手が少ないことがあげられる。従って、専門的な相談に父親をいかに参加させるかが大きな問題である。

②その父親の心身状態の悪さは、子どもと妻の心身状態が悪いこと、上述の相談相手が少ないこと、父親自身の年齢が高いことである。

③父親、母親、子どもの各々の心身状態は、相

互関係にある。即ち、父親ないし母親が自身自身のそして配偶者の、子どもの心身状態をいかに認識評価するかの相互影響下に三者の心身状態が規定されている。

7. 父親、母親の家庭観—健常児と発達障害児の比較—(横井班員)

①家庭生活では一人一人が自分の好きなことをして過ごすよりも、家庭の団欒を大切にしたいと考えるのは、健常児よりも障害児の父母に多く見られる。

②離婚について、正当な理由があれば離婚した方がいいと考えるのは、健常児の父親が多く健母、障父、障母との間に有意差がある。

③障害児の母親は毎日の生活のなかで「何か心が満たされないで淋しい」と感じ、他の3群に比べ有意に高い。

④障害児の母親は、心身快調とする人が31%で、他群に比し低率である。

⑤障害児の母親は、高齢者、病人、障害者の世話について、家庭でなくてもできると考える人が、他群に比べ高率である。

⑥障害の有無に関係なく、父親と母親を比べると母親の方が何か心が満たされず淋しく、家族と通じ合っていない、と感じる人が多く見られる。

8. 父親の子どもに対する心理的発達への援助機能—事例研究から—(吉田班員ら)

①相談日を日曜、祝祭日に行なうことが父親の相談参加を促す条件である。

②相談に通う児のうち、その2/3の父親は積

極的に子どもに関わり、母親の理解者、協力者である。

③相談に父親が参加することが、子どもの心理的発達に有効と考えられる。

④問題を持つ子どもの事例研究から、父親の機能として次の3つをあげることができる。

i) 母親を支え、安定させる機能

ii) 母子関係を発達させる機能—乳児期の母子関係から、幼児期、思春期へと—

iii) 子どもの社会的モデルとしての機能—直接的なモデルと母親を通しての父親モデル—

9. 疾患をもつ子どもに対する父親の役割に関する研究(西林班員ら)

①父親の面会率は、73.7%である。

②血液、悪性疾患の父親面会率は他疾患に比べ有意に低値である。

③病期による面会率には、一定の傾向はみられない。

④外科疾患では、感染症に比べ8日以上入院期間では面会率が有意に低値である。

⑤父親の面会率に影響を与える要因は、

a. 感染症では第一子が多く、第三子では有意に低値である。

b. きょうだい数は、3人が低率である。

c. 祖父母が同居していないほうが面会率が高い。

⑥父親の面会の目的は、子どもと会うことと病状の把握である。また、200例中30%の父親が休暇をとり、母親と交代し付き添っていた。

## <父親の役割に関する母子保健活動への提言>

1. 母親が育児を楽しいことと思ひ、負担を感じないために父親のなすべきことは、

(a)父親は育児について母親とよく話し合い、或いは話をきくことが重要である。

(b)父親は家庭生活上重要な事柄について、判断し、決定すること。

現実の育児・家事を行なうことが望ましいであろうが、諸事情により充分にできない場合も、上記2つのことをなすうれば、母親の育児を援助することになる。即ち、母親は育児に協力的だと思ひ、母親の精神的な支え、安定化にはたらくことになる。

2. 父親の母子関係及び子どもへの心理的役割とは、

(a)父子関係の形成と発達、母子関係の発達を促進する。即ち、母子密着の乳児期の母子関係から、心的絆としての幼児期、児童期の関係へと発達を促す。

(b)父親は、子どもの社会的なモデルとしての道具的役割をもち、社会性の発達に寄与する。

(c)父親の心身状態がよいことは、母と子の心身状態により影響を与える。

3. 父性行動を生起させるための要因とは、

(a)妊娠中から母親を媒介として関わることによって、父親意識が生じ妊娠過程の進行と共に変化する。

(b)立ち会い分娩等最早期からの父親と子どもの関わりは、子どもとの遊びや世話そして児へ

の肯定的な感情をより生起させる。

#### 4. 心身障害児、情緒・行動的な問題をもつ児、入院病児への父親の役割とは、

- (a) 父親が自分自身の心身状態を良くないと思っていることと、子どもや母親の心身状態の不調とは関連を有し、従って父親の心身快調さは障害児を育てるうえで重要な要因である。
- (b) 障害児をもつ母親は、健常児の父母、障害児の父親と比べて、毎日の生活が何か充たされず寂しく思い、心身状態はよくなく、家族と通じ合っていないと感じているものが多い。従って、健常児の父親以上に母親とよく話し合い、母親の精神的な支えになることが重要である。

#### 5. 心身障害児、情緒・行動的問題をもつ子どもの父親の相談参加と父親への援助

- (a) 障害児の父親の心身状態の不調を規定する1つの要因は、相談相手が居ないことであり、父親にいかに関与行動を起こさせるか、そしてその受け入れ、対応を整えることが重要である。
- (b) 相談・診療機関における父親の相談参加を検討すると、相談日を日・祝祭日にもうけることが必要であった。但し、今後乳幼児健診とそれ以後の継続相談への父親参加をも考えると、一方では子どものために休暇をとるという意識をたかめること、他方、長期の療育が必要な障害児をもつ父親の労働条件の見直し整備が必要であろう。
- (c) 事例研究の結果は、父親が相談に参加するこ

とによって、子どもの心理的発達が促進されることが知られた。その発達への役割として

- ① 母親を支え、精神的に安定させる
- ② 母子関係を発達させる
- ③ 子どもの社会化のモデルとなる、の3点であった。
- (d) 父親相談の過程では、父親を支え、父親の子どもとの関係を形成する能力を高め、更に夫婦関係の改善・修復をはかることが主たる仕事である。
- (e) 子どもが病気になること、しかも入院を要する病気は、児については分離体験による情緒的問題が、他方母親への心身の負担が思い。松山日赤小児科病棟での父親面会率は73.7%と比較的高率で、その目的は子どもに会うことと、病状の把握であった。母と子への効果については今回は明らかでないが、父親面会は母子に対しポジティブな影響を与えるであろうとは推測し得る。

なお、父親の面会率を高める要因は、第一子であることと祖父母と同居していないことであった。200人中30%の父親は休暇をとり、母親と交替して児に付き添いをしており今後父親の面会を促進する要因と母と子への効果について明らかにする必要がある。

以上の知見を更に要約すると次のようである。

- 1. 父親が単に育児・家事に参加し、母親の代行のみであれば、父親の役割を果たし得ない。育児について母親とよく話し合い、家庭生活上重要な事柄について、判断し、決定することが

父親の大きな役割といえる。

2. 父子関係は、妊娠期・乳児期初期から形成と発達させることが望ましい。

3. 父子関係は、母子関係の発達を促進する。

4. 子どもにとって父親は、社会的なモデルであり、社会性の発達に寄与する。

5. 父親の心身状態は、母子双方の心身状態と関連を有している。特に障害児の父親の心身状態に対する援助が必要である。

6. 障害児の父親は、相談できる人が少なく、従って相談行動を起こさせ、受けとめる相談機関が必要である。

7. 障害児の母親は気持ちが充たされず寂しく、家族と通じ会っていないと思い、心身状態も良くない。父親による母親への援助が必要であるし、父親が相談過程に参加することにより、このことがより効果的になし得る。

8. 情緒・行動的問題をもつ子どもの父親が相談に参加することによって、児の心理的発達が促進される。ここには父親を支えること、父子関係を発達させること、夫婦関係の改善・修復の仕事がある。

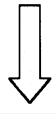
9. 子どもが病気になること、しかも入院を要する病気は、母子双方への身体的・心理的危機である。父親の面会、付き添いは危機を乗り切る重要な行動である。

について配慮し、なしうる援助を行なう必要がある。

また、障害児、情緒・行動的問題をもつ子どもの父親の相談を行なうことが必要で、そのための物理的、人的受け入れ体制をつくることが重要である。ついで、病児保育がクローズアップされている現在、入院病児を含めて母親への援助のために父親がその役割をいかにとるかも課題であり、父親の特別休暇制度も考慮すべきであろう。

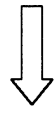
#### ～母子保健活動の実際と今後の課題～

妊娠中の母親学級、乳幼児健診への父親の参加を積極的に求め、父親の役割に関する保健指導、相談を行なう。その際、父親の心身の健康



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要旨:望ましい育児環境とは、子どもの心身の発達や健康を促進するようはたらく環境であるといえよう。ひと言でいえば発達促進的環境といってもよい。ちなみに、育児とは、子どもの生命を守り、心身の発達を助け、その健康の増進をはかり、そして社会のなかで生活していけるように育てることである。育児には、身体的、心理的そして社会的なレベルでの複雑な働きがあるといってもよい。母親のみで、あるいは母子関係のみでこれだけのことをなし得るとは思われない。一方、現在の家族状況、すなわち、親、きょうだい、近隣の育児サポートの得られない核家族状況、母親就労やそして母親(女性)の広義の社会参加への強い志向を考えると、母親のみが育児を行なうこと、望ましい育児環境を提供することは、難しいといえよう。

現在の家族の置かれているこのような心理社会的状況から、父親も育児においてその役割を果たしていくことが必要不可欠であろう。本研究では3年間にわたり、育児における父親の役割とは何かを基本的なテーマにし検討をかさね、その最終報告として諸研究を総括し、父親を育児支援のひとつの柱として母子保健活動に組み込むため、以下の諸点を提起する。